

氏名	さいとうしげる 齋藤茂
----	----------------

(論文内容の要旨)

本論文は唐代後半、八世紀後半から九世紀初にかけて活動した詩人の孟郊について、その文学の特徴と文学史的に果たした役割とを論じたものである。本論文では、孟郊の作品の中で聯句と連作詩が最も特色を持つと考え、これらに重点を置いて考察を加えている。全体は四章と略年譜から成っている。以下、構成にしたがってその内容を略述する。

序章の「孟郊の位相」では、孟郊が一般に中唐期と呼ばれている変革の時代に在って、どのような位置に立っていたのか、およびその文学、個性が後世どのように評価されたかという点を中心に論じている。

唐代に入っても、詩文は概ね宮廷や貴族のサロンを中心に発達してきたが、安史の乱を経た八世紀後半には、地方長官や特定の文学者を中心としたグループが形成され、そこで新たな工夫が凝らされる傾向が顕著になった。それに伴って、新しい時代の担い手として社会進出を果たした士大夫層の好尚や関心を反映した作品が、数多く生み出されたのである。その中で、従来の形式に新しい息吹を与え、文学の対象を広げつつ、それにふさわしい表現を模索し続けたのが韓愈を中心とするグループであり、そこで韓愈とともに大きな役割を果たしたのが孟郊であった。

まず孟郊の簡単な位置づけを行った後、その文学の全般的な傾向と特徴とを論ずる。その上で、彼の個性を最も強く主張する作品群が、韓愈と行われた聯句、および晩年に集中的に制作された連作詩であることを指摘した。また孟郊に対する評価について、特に宋代以降に見られる傾向と特徴を中心に整理している。

第一章の「事跡の検討」では、まず若年の経歴の中で従来議論の有った、嵩山での隱棲の是非と、科挙受験の時期および回数の問題という二点に関する論者の見解を述べている。正史に見える孟郊の傳記は簡略であり、韓愈の『貞曜先生墓誌銘』

を除けば、他に直接彼の事跡を伝える資料はほとんど無い。それゆえ若年の事跡に関して不明な点が多く、中でも『舊唐書』の傳に見える「少隱於嵩山」という記述に対しては、研究者の間で賛否が分かれていた。本論では孟郊の詩に見える幾つかの表現を手がかりに、『舊唐書』の記述に一定の根拠があると推測する。また科挙受験に関しては、合格まで四回の受験を要したと見る説を支持している。

次に血縁、地縁、科挙という三つの要素に由来する孟郊のネットワークについて、主要な人物との交流を主に検討を加える。血縁者では従叔の孟簡、湖州という地域では文壇のリーダーであった皎然、そして科挙受験を通じた形成された関係では韓愈と李觀、および張籍、李、賈島、盧仝を取り上げて、贈答された作品を手がかりに、それぞれの交流の意義を個別に検討する。その結果として、孟郊においては皎然および韓愈との交流が最も大きな意味を持っており、文学的な意義だけでなく、有力者への推薦などといった官僚社会との関わりにおいても、重要な役割を担ったことを指摘している。

第二章の「聯句の検討」では、韓愈と行った聯句の作品を検討し、その特徴と後世への影響を中心に考察する。

まず聯句の歴史を踏まえて、二人の聯句の持つ新しさ、意義について、主題、句法、用韻、表現の各面から指摘し、具体的な例として短編作品四篇と「征蜀聯句」とを取り上げて分析を加える。韓孟聯句に対する従来の研究は、彼らの代表作である「城南聯句」にほぼ集中する観があったが、本章では「城南聯句」の意義を十分に理解した上で、敢えて聯句全般を視野に収めて検討を行っている。

短編作品を取り上げたのは、それらが他の作品の中でどのような位置を占めるかを明らかにするためであったが、検討の結果、孟郊の集に収められる短編三作はいずれも初期の作品で、二人にとって謂わば習作に当たると見られること、そして韓愈の集に収められる「莎棚聯句」は、逆に二人の間での最後の作品と見られることを論ずる。また「征蜀聯句」については、この作品が反乱軍の討伐という政治的な主題を持っている点に注目し、聯句が本来的に持っていた宴席での遊戯と祝頌とい

う二つの要素を、時代に合った新しい形で示した作品と評価する。またこの作品が、韓愈の代表作の一つである「元和聖徳詩」と深く関わることも指摘する。なお、第二章で具体的に取り上げたのは都合五篇であるが、第一章においても、事跡の検討に関連して「雨中孟刑部幾道に寄す聯句」「遠遊聯句」を紹介している。

後世への影響については、現時点では十分な検討を行える状態ではないとして、取りあえず比較の対象として皮日休、陸龜蒙の聯句、および蘇舜元、蘇舜欽兄弟の聯句を取り上げたに止まっている。しかし、これらに対する簡略な検討を通じて、二人の聯句の与えた影響の大きさは窺われる。また、詩話などで取り上げられることの多い「城南聯句」のみならず、「征蜀聯句」も後世に影響を与えていることを明らかにしている。

遊戯文学として発達した聯句は、その非正統性ゆえに積極的に取り上げられることが少なかったが、従来指摘の有るように韓孟聯句は文学作品として優れた側面を持っており、それは代表作に止まらないこと、そして彼らの試みが後世も受け継がれていたことが明らかにできたことは、一定の意義が有ったと結論する。

第三章の「連作詩の検討」では、孟郊が自らのスタイルとして確立した連作詩の内容や特徴について論じ、十二組の作品すべてに詳細な検討を加えた。全体を九節に分け、まず主要な作品をその主題と推定される制作時期から幾つかのグループに分けて検討し、最後に全体的に見られる傾向や特徴について指摘を行う。

彼の連作詩は、洛陽に移り住んだ元和元年の冬以降に、集中的に作られたと論者は考える。そこで第一節では、最初の作品と見られる「石淙十首」を取り上げ、その主題、内容および用いられている詩語の特徴を中心に検討している。その結果この連作詩が、韓愈と行った聯句の経験を踏まえ、自らの新しい詩作のスタイルとして選び取られたものである可能性が高いことを明らかにしている。

第二節では自らの家庭を主題とした二作を取り上げる。まず「立德の新居十首」では、都市部での住居を描くという主題の新しさを指摘し、従来の住居を主題とする作品が持つ「隠棲」と「幸宅」の両面の性格を兼ね備えている点を論じた。ま

た彼の生活の具体的描写が見られることも、この連作の一つの特徴として言及している。続いて嬰兒の死を悼んだ「杏殤九首」を取り上げ、嬰兒の死を「杏の蕾が霜で切り落とされた」と比喩することの意味、その不当性を天に訴えるというモチーフなどについて論ずる。またこの作品が広く読まれ、後世の同じ嘆きを詠う詩の一つの祖型となっていることも指摘している。

第三節では友人の死を悼んだ「盧殷を弔う十首」を取り上げ、そこに色濃く見られる孟郊の「詩人」に対する考え方の特徴を検討する。それは端的に言えば、「詩人」は世に容れられず「餓死」する運命を持つと規定している点にある。これは次の第四節で検討した「古」に対する彼の理念のあり方とも深く関係している。

第四節では、孟郊の「古」に対する考え方を、自身の作だけでなく、韓愈が孟郊に贈った詩などからも検討し、さらにそれを踏まえて、前代の偉人である元徳秀を悼んだ「元魯山を弔う十首」の内容を検討する。そして孟郊の復古思想の中心に元徳秀をモデルとした高士のイメージが有り、そのイメージに「詩人」としての自らの生き方を重ねようとする意図が見られることを指摘する。

第五節では川を主題とする二つの作品を取り上げ、その自然の形象を中心に検討した。まず「寒溪九首」は、氷結した川が春の日差しによって復活するという主題を持つが、そこに見られる加害者的な自然像、および寒気によって執行された「天の刑罰」の描写とその不当性の告発というモチーフなどについて、先の「杏殤九首」とも比較しつつ検討した。一方「峽哀十首」は、三峽を舞台にそこに死んだ逐客を弔うという主題を持つが、峽谷全体が蛟龍と化して旅人に襲いかかるというモチーフを使っている点に大きな特徴がある。そこに用いられている三峽と世途、蛟龍と讒人がそれぞれ重ねられた二重構造、および蛟龍のイメージが被せられた様々な自然の形象について、特に踏み込んだ検討を加えている。

第六節では詠懐陳思の連作二篇を取り上げた。孟郊以前の代表的な連作詩と言え、魏の阮籍の「詠懐詩」、晋の陶淵明の「飲酒」「擬古」、唐の李白の「古風」などの作が挙げられるが、いずれも詠懐陳思を主題としたものであった。「感懐八首」は、これらの先行作品、とくに阮籍の「詠懐詩」を一つの範に取りながら、孤独感、

不遇感を詠った作品と見て、その内容を検討する。一方「秋懷十五首」は、「感懷八首」で範とした伝統的な詠懷の型を敢えて外し、老いと病の中で迎えた孤独な秋の感慨を詠う、極めて個性的な作品であると判断している。そして肉体的な衰えから、月、風、露などの自然物が彼の身体を苛むものとして描かれる点、および讒人に対する観念的憎悪や、社会に対して発せられる訓戒など、この連作詩において特に顕著に見られる要素について検討を加える。さらに、韓愈の「秋懷十一首」との関連についても、従来言われている以上に密接な関係が有った可能性を指摘している。

第七節では、友人の僧侶を送る「淡公を送る十二首」を取り上げた。中唐期は士大夫と僧侶の交流が以前にも増して盛んになり、特に僧侶を送る「送僧詩」が多くなることが指摘されているが、これは連作形式を採る点でその中でも異彩を放っている。だが、この連作詩については、孟郊に対して否定的な評価を下した宋の蘇軾が、唯一肯定的に言及していることが注目される。その理由を検討し、さらにこの連作に込められた江南の地への思いと、僧淡然に対する友情について、より詳しく論ずる。

第八節は、残る「花を看る五首」と「濟源の寒食七首」の二つの連作詩について、その内容、制作時期などの検討を行っている。

最後に纏めとして第九節を置き、以上の連作詩に見られる全般的な傾向や特徴を整理した。連作詩の検討を通じて、孟郊の詩語の特質、特異な自然像の形成過程とその意義、および孟郊の復古思想の内実や彼が用いた「詩人」の語の概念などについて、解明している。

最後に略年譜が附されている。孟郊の年譜は華忱之「孟郊年譜」（華忱之、喩學才校注『孟郊詩集校注』に附載。人民文学出版社、一九九五）が代表的な存在であり、従来の研究では基本的にこれに依拠してきた。しかし、賈晋華氏らによって既に幾つかの問題点が指摘されているように、改訂すべき箇所も少なくない。今回、論者は自らの研究に基づいて華譜の改訂を行った。孟郊の事跡に関わる資料は少な

いため、大半が推定に過ぎないとはいえ、華忱之年譜を補訂するものである。

孟郊は韓愈の友人として、また個性的な詩風が好まれた九世紀初頭の唐詩人として、重要な位置を占める存在であるが、我が国ではこれまで研究が十分でなく、したがって専著も出されていなかった。研究論文でも、韓愈のグループの一員として、あるいは賈島と並ぶ苦吟派の詩人として取り上げられることが多く、詩人としての個性や魅力を正面から論じたものは、必ずしも多くなかった。本論は、孟郊の詩人としての魅力を説き、当時の詩壇における役割を論じるだけでなく、後代、とくに宋代の詩歌との関連を意識して、彼の文学が持つ意義を考察したものである。したがって、孟郊の詩歌に関する専論としてのみならず、唐代後期から宋代にかけての文学史的な流れを考える上でも、一定の意義を有する。

氏名	さいとう 齋藤	しげる 茂
----	------------	----------

(論文審査の結果の要旨)

中唐の文学は近年研究が充実してきた領域の一つであり、専著、論文ともにめざましい勢いで公刊されてきたが、その活況のなかにあつて、孟郊(七五一～八一四)だけはとりのこされた感がある。中国では華忱之・喻学才氏(一九九五)、台湾では邱燮友・李建崑氏(一九九七)による校注がある程度であり、日本においては論文すらごくわずかしは見られない。それまでの文学的因襲を逸脱して白居易は平易に向かい、韓愈は晦渋に向かうという両極に分化する傾向の、晦渋の方向、しかもそれを極めたところに位置する孟郊はその詩の難解さもあつてとりつきにくかつたためであろうか。本論文はその容易ならざる孟郊の全体像に挑んだ力作であり、困難な対象に果敢に立ち向かつた意気込みをまず評価しなくてはならない。本論では引用した詩のすべてに訳を付している。正確な読解あつてこそ立論も成立するものであるから当然のこととはいえ、困難な訳詩の業を成し遂げていることも称えられるべきであろう。

本論は主に三つの部分から成る。孟郊の伝記、韓愈との聯句、そして孟郊の連作詩である。紙数が増えることにも示されるように、あとに行くほど論者の力も加わっているように見える。

第一章は孟郊の事跡を考察している。伝記に関してはこれまで華忱之氏による年譜が通行してきたが、論者は他の資料も渉獵して華忱之氏の記述の一つひとつに再検討を加えることによって相当な箇所を訂正案を提起している。その改訂作業には華氏の用いていない周辺資料を捜し得て論拠としているのみならず、詩そのものについても華氏の解釈より適切な捉え方をすることによって論を組み立てている。すなわち論者の伝記考証は資料の博搜にとどまらず、詩の読解にも関わるものである。事跡の繫年には確定にまで至らない箇所もかなりのこることは資料の制限からやむをえないとはいえ、少なくとも華忱之年譜に疑問をつきつけた点は大きな功績といふべきであり、今後は論者の作成した「孟郊略年譜」(本論文に付載)がより信頼

できる年譜として用いられることであろう。

第二章は韓孟聯句についての考察である。この章における功績は、韓孟聯句の制作時期を新たに提起したことである。従来、さしたる根拠もないまま、十三首のこの韓孟聯句をほぼ一括して元和元年を中心とする時期に掛けていたが、論者は周辺の事象と作品そのものを仔細に検討することによって、比較的短い三首の聯句は早い時期に作られたものであり、「莎柵聯句」のみは他に遅れて二人の最後の作とする結論を導き出している。そこに至る論は十分に説得力に富むものであり、今後は論者の説が基準となるであろう。これは単に繫年を正したというにとどまらず、韓愈と孟郊の聯句が表現の可能性を追求しながら展開していくその過程を明らかにするもので、作品自体の理解を深めることにもなっている。

第三章は孟郊の特質の一つとなっている連作詩を取り上げる。連作詩は遠く阮籍の「詠懐八十二首」を嚆矢としてその流れはあるが、孟郊のそれは伝統的な連作詩の系譜とは位相を異にする、孟郊が新たに切り開いた独自のものであり、それは韓愈との聯句経験を経たからこそ可能になったものであると論じている。この知見も論者の大きな功績の一つといえよう。一つの様式の発展が新たに別の様式を生み出していくという、文学そのものの生き生きとした展開のありさまが浮かび上がってくるかのようなのである。

聯句にせよ連作詩にせよ、解しがたきをもって知られる孟郊の詩のなかでもとりわけ難解なものであるが、同時にまた孟郊の本質を成す重要な詩群でもある。この二種を取り上げたことは孟郊の文学の最も枢要な部分を解明しようとする論者の姿勢をあらわしている。

「郊寒島瘦」(蘇軾)——孟郊は寒々としている、賈島は瘦せ細っていると称され、狭い詩的世界のなかに自閉しているかのような印象が抱かれている孟郊が、本論を通して実は意外なほど多彩な詩を展開していたことが明らかにされた。枯渴した「寒」ではなくて、エネルギーが凝縮した、密度の異様に高いブラックホールのような詩的世界を作っていたかのようなのである。孟郊に対するこうした見方も論者の丁寧な繫年によって作品制作をあとづけることと、作品の的確な読解によってもたらされた

ものにほかならない。

孟郊像をかく描き直したのみならず、論者は孟郊を中唐から宋代に至る文学史の流れのなかに位置づけることも試みている。孟郊が同時代をはじめとして晩唐、宋代の文学のなかにもかなりの影響力をもち、のちの文学のなかにその痕跡をうかがうことができることも、論者によって明らかにされた知見である。

とはいえ、調査委員が関心を共有するためもあって、さらに望みたいところも少なくはない。たとえば連作詩について、上述したように論者は伝統的な連作詩とは異質のものとして位置づけるが、孟郊ほど文集全体のなかで突出していないにしても杜甫の連作詩、「秦州雜詩二十首」「秋興八首」などは、論者のいう孟郊の新たな連作詩の先駆けとなるものではなかったか。杜甫への言及がないのは欠如といわねばならない。また孟郊の詩に見える自虐的な唱いぶりは孟郊の友人韓愈にも認められ、先だって杜甫にも顕著な自己認識の仕方であるが、韓愈、さらに杜甫にはその自虐がしばしば戯画化され、ユーモラスな味わいを伴うのに対して、孟郊の自虐にはユーモアがない。この差異をどう考えるかについても、言及が望まれるところである。

詩の分析についても更に鋭くあってほしいという思いも払拭できないが、孟郊という極めて手強い対象について、本論がこれまでの研究を凌駕する数々の成果をあげていることは確かである。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2008年7月3日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。